

天城池田家歴代当主墓所等

- 初代 **池田由之** (よしゆき)
江戸から米子への帰路、家臣の大小姓神戸平兵衛により刺殺(播磨国揖保川渡場)
清洞寺(米子市西町)
海禅寺殿前羽州太守雲岳永節大禅定門
海禅寺殿靈岳永祥大居士
- 2代 **池田由成** (よしなり)
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
心宗院殿前羽州太守一峯幻入大居士
- 3代 **池田由孝** (よしたか)
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
天叢院前上林署法元了入大居士
- 4代 **池田由勝** (よしかつ)
吉良邸討入りの大石良雄と縁戚関係にあることから2,000石減封
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
円通院前鴻臚卿智閑禅光大居士
- 5代 **池田保教** (やすのり) ⇒ 岡山藩3代藩主**池田継政** (本家相続)
岡山藩第2代藩主池田綱政の第17男
曹源寺内池田家正覚谷墓所(岡山市中区円山)
保国院殿鉄叟空山大居士
- 6代 **池田政純** (まさずみ)
岡山藩第2代藩主池田綱政の第18男。池田保教の本家跡継ぎに代わり天城池田家跡継ぎ。
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
徳雲院前泉州逸嶽崇俊大居士
- 7代 **池田政喬** (まさたか)
岡山藩第3代藩主池田継政の子。
天城池田家揖山墓所(倉敷市藤戸町)
徳芳院前倉部郎孤室有隣大居士
- 8代 **池田政孝** (まさたか)
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
正眼院殿前泉州密峰言旨大居士
- 9代 **池田政徳** (まさよし)
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
法眼院格外玄機
- 10代 **池田政昭** (まさあき)
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)
法眼院活道全機
- 11代 **池田政和** (まさやす)
明治元年、戊辰戦争での官軍の先鋒として東北各地を転戦。
天城池田家櫻山墓所(倉敷市藤戸町)

天城地域の古寺

◎ 遍照院

天城の片原にあって恵日山後嶽寺遍照院といい、薬師如来を本尊とする。別名を瑠璃山薬師寺ともいう。山門を入ると正面に本堂があり、左手に成田不動堂、観音堂があり、右手に客殿と庫裡がある。

鳥羽天皇の永久年間（1113～1117）の創建と伝えられているが、誰の開基になるか定かでない。後20年を経て、天承元年（1131）に堂宇が完成したという。その後500余年を経て、寛永16年（1639）池田出羽由成が下津井城を引き払い天城に移ってから、当寺の薬師如来を尊信し、広田神社を祈願所と定めたとき、当寺（薬師寺）をその別当寺【べつとうじ：神仏習合が許されていた時代に、神社を管理するために置かれた寺】に充てたのである。その後間もなく承応3年（1654）火災に罹り、一山悉く烏有に帰したが、寛文2年（1662）僧長雄が由成庇護のもとに再興に当たり、完成したのが現在の建物である。

本堂は3間四方で榎、栗、檜などを交え用い、その構造形式から見て江戸初期のものと考えられる。客殿は草葺きで外観は粗末であるが、内部の構造からみて元禄期の建築と思われる。上段、下段の間がある。庫裡は入母屋重層で妻入りとなっており、下津井城取り壊しのとき、単層檜を移し作ったもので、柱はカンナを使用せず面をとり、棟瓦には五三の桐のものがあって、桃山期の様式を残している。寺宝に金胎大日八祖画像（絹本双幅）、武元登々庵筆五言詩文（大幅）、古市金峨筆鶴（画幅）などがある。

児島霊場88ヶ所第45番札所である。

◎ 海禅寺

天城の川向にあり、臨済宗で西光山海禅寺といい、釈迦如来を本尊とする。松並木の参道を通して山門を入ると、何故か右手に弘法大師堂があり、正面には庫裡、左手に本堂と客殿（方丈）がある。

慶安元年（1648）岡山国清寺の大華和尚の法弟大痴和尚を開基として、池田出羽由成が建立し、菩提寺とした。

由之の位牌を安置する本堂の天井、欄間などは、下津井城の廃材を使っている。元禄11年（1698）火災に罹ったが、同12年（1699）由孝が再興して寺領130石を寄進した。当時は寺域も広大で堂塔も備わっていたが、明治維新とともに寺領を失い、池田氏の手を離れて檀家も次第に減少し、今日の姿となったのである。

境内の墓地には池田氏の墓碑の外、芭蕉翁3世（孫弟子）の墓がある。寺宝として、由之の賛【さん：画面の中に書き添えた、その絵に関する詩句】のある狩野元信筆の池田勝入斎信輝公の画像、大石良雄【おおいしよしお：赤穂藩の筆頭家老。通称は内蔵助。母は池田由成の娘】の文殻観音があったが今はない。

◎ 静光寺

天城の上之町裏手にあり、浄土真宗東本願寺派に属し、阿弥陀如来を本尊とする。天城家中屋敷入口の総門を縮小して縮小して移築（昭和14・15年頃）した山門を入ると、正面に本堂、本堂の左手に客殿、庫裡がある。

寺伝によれば、京都の公卿が本尊を奉じて児島郡に來たり、稗田なめらの静光寺池付近に一時草庵を結んでこれを祀ったが、元和4年（1618）円空によって天城に移され、静光寺が創建せられた。由成の室明厳院釈静光禅尼が篤く尊崇し、死後境内に葬った。爾後池田家から供養料として20俵が寄進されている。

寺宝として東本願寺第2代の宣如上人筆の法名南無阿弥陀仏、親鸞直筆の法名南無阿弥陀仏、弘法大師筆という紺紙金泥法華経がある。

◎ 正福寺

天城の川向にあり、日蓮宗で京都大本山妙顯寺末に属し、恵光山正福寺といい、釈迦如来を本尊とする。山門を入ると正面に本堂があり、それに続いて左手に客殿、庫裡がある。

寛永年間（1624～1645）池田由成が米子から児島に移封されたとき、日宥上人はこれに従って來り承応3年（1654）天城に正福寺を建立した。由孝の室聞寿院殿守庭妙花大信女が日蓮宗を信仰していたので、境内本

堂裏手に供養塔がある。池田氏は本堂 30 坪、庫裡 25 坪を建築して寄進し、永代米 15 俵を供養料として寄進した。なお、境内右手には明治戊辰の役会津の戦で戦死した齋藤小十郎の官修墳墓【かんしゅうふんぼ：会津戦争による戦没者のための官営の墓地】もある。

山門は下津井城の城門の一つを元禄 7 年（1694）に移して建てたものである。この門は本柱 2 本で支えられた棟門で、男梁、女梁、墓股などの木組、屋根の軽快な反りなど桃山時代の風を残している。屋根瓦、棧唐戸、添柱など近年修理が加えられ、時代の特色を損なっている。

寺宝に、上月景実寄進の釈迦涅槃像、池田家寄進になる加藤清正が朝鮮征伐の際に使用したといわれる幡二旒などがある。

◎ 正覚寺

天城の上之町の裏手にあり、浄土宗に属し、阿弥陀仏を本尊とする。山門を入った正面に庫裡があり、その左手に続いて本堂がある。別に理源大師堂（天保 12 年（1841）建立）、弘法大師堂（児島 88ヶ所の第 81 番札所）がある。

貞享 5 年（1688）党譽を開基として池田由孝が建立した。由成の側室栄樹院殿の浄土宗への帰依もあって、池田氏の庇護を受けていたようであるが、その関係は他の寺院ほど深くなかったようである。

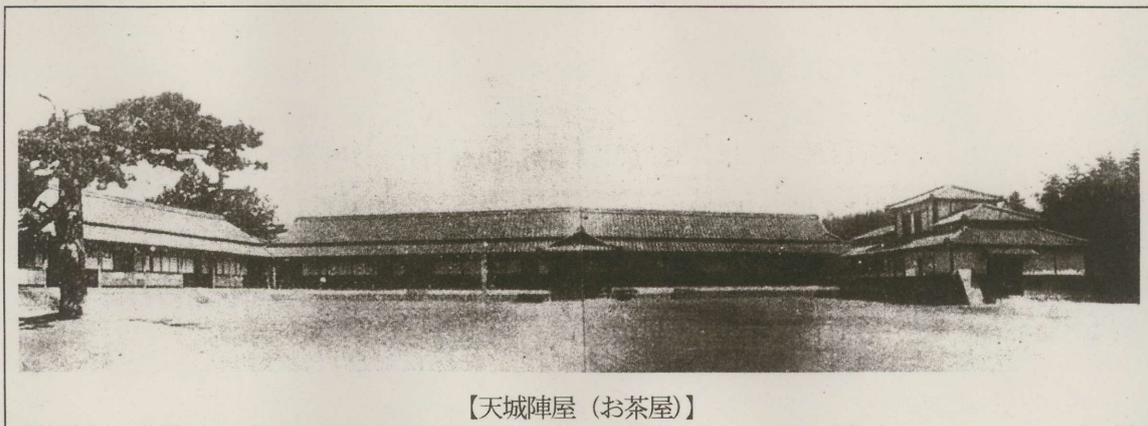
【『藤戸町誌』より転載：一部修正】

● 天城池田氏

天城池田家は、江戸時代の岡山藩主池田氏の一族で、備前天城の領主。

初代池田由之（いけだよしゆき）は、池田輝政（兄之助の戦死により次男の輝政が家督相続、関が原合戦後姫路城初代藩主）の兄池田之助（いけだもとすけ：父信輝と小牧長久手の戦いで戦死）の嫡男で輝政に仕え、伯耆米子 3 万 2,000 石を領した。2 代由成が、藩主光政の岡山移封に伴い米子から備前に移り、寛永 16（1639）年、天城に陣屋を構え、代々領したため天城池田家と呼ばれた。5 代由勝は、元禄赤穂事件の際に大石良雄（赤穂藩筆頭家老：一般には大石内蔵助の名で知られる：天城池田家 3 代当主池田由孝の姉熊子の嫁ぎ先大石良昭の子）の縁戚であったため、由勝の遺領を相続した 5 代保教は 2,000 石を減じられ、以後禄高 3 万石となり明治維新を迎える。

- ・慶長 6（1601）年 播磨佐用利神城（平福） 22,000 石
- ・慶長 14（1609）年 備前下津井城 32,000 石（池田由之）
- ・慶長 18（1613）年 播磨明石城 32,000 石
- ・元和 3（1617）年 因幡米子城 32,000 石
- ・寛永 9（1632）年 備前下津井城 32,000 石（池田由成）
- ・寛永 16（1639）年 一国一城令により下津井城廃城 ⇒ 天城陣屋形成 32,000 石（池田由成）
- ・宝永元（1704）年 池田由勝死去に伴い池田保教相続 30,000 石



【天城陣屋（お茶屋）】

児島八十八か所巡礼

児島八十八か所巡礼 第43番 西明院

倉敷市

続いて西明院であるが、次の礼所の先陣庵とは同じ場所にある。

ここは元々先陣庵の敷地であり、西明院は種松山の山上にあったものが移転したとのことである。

児島霊場の開設にまつわる逸話として、約160年前江戸時代の終わり頃に、この西明院と吉塔寺(24番礼所)と備中国分寺の3人の住職が集まり、人生はただか50年だが後の世に残る立派な仕事をしよう、という話になり、西明院の住職は金比羅大権現の勧請を、吉塔寺の円明僧正は児島八十八か所の開設を、国分寺の住職は五重塔の建立を成し遂げた。

そういうわけで背後の丘の中腹には金比羅宮があり、寺の本堂と登廊で結ばれ、神仏習合となっている。

現在の本堂は移転した際に建てられたもので、あまりお寺の本堂らしくなく、庫裡の一部に入母屋向拝を付けたような感じである。(写真1)

他に唐破風の玄関のある客殿と鐘楼がある。(写真2)

石標には大正13年1月移転と刻まれており、これがこの地に移転した年だろう。(写真3)

後日、かつての礼所の名残を求めて種松山に登って見た。

山上は公園のようになっていて、その奥に昔の石垣や打ち捨てられた石造物があった。(写真4)

『児島風土記』によれば、かつては山頂に1軒の遍路宿と3軒の茶店があり、金毘羅宮の祭日には境内で競馬や相撲が催されたとのことであるが、その様を思い描くにはかなりの想像力が必要である。



写真1



写真2



写真3



写真4

前へ 上へ 目次 後へ

このHP内の著作権はすべて、今井君に属します。

開設日 2011年 10月 吉日

Copyright(c) : imai ALL RIGHTS RESERVED